

Fast life, slow life

村越 真

北欧遠征から、IOF総会へ。日本も国際的な舞台の一員となったことを感じる。

夏の暑さにバテ気味とは言え、合宿も、富士登山駅伝も楽しい。日本の夏の暑い年りの楽しさを実感。

ワールドカップ(WC)へ遠征

6月27日

北欧に向けて出発。今回初めて夜22時に離陸するエール・フランスの夜行便を利用した。すっかり暗くなった風景の中を成田に向かい、閑散としたターミナルを歩いていると、北欧への旅もいつもとは違った新鮮なものに感じられる。

パリで乗り換え、昼過ぎにはオスロ空港に着く。既に10日前にノルウェーに来ている山田と落ち合い、志村直子と3人でひたすらレンタカーを北に向けて走らせる。目的地は世界遺産でもあるリョロス。最北の地は別として、スカンジナビアでももっとも寒い場所で、冬のマイナス40度は珍しくないという。

その日と次の日は、軽くトレインでトレーニング。そして3日目は、リョロスの街中でのスプリントレースであった。女子は52人しかいないので、志村はいきなり午後の決勝進出であった。男子は午前中に予選があったが、山田も僕も予選を通過することはできなかった。

スプリントの決勝は17時から行われたので、終了した時にはすでに19時を回っていた。成績処理のトラブルがあり、もともと9時に予定されていた監督会議は、「少なくとも」1時間は延期されるということになった。10時過ぎのテクニカルミーティング。こういうトラブルに遭遇すると、同じトラブルに遭遇した他の国のオフィシャルたちとは、途端に仲良くなれる。同じ体験を共有したという感覚があるからだろうか。

隣のコテージにいたデンマークに頼んで、志村と山田を乗せて帰ってもらった。彼らは快く引き受けてくれたばかりか、「じゃあ、車は2台返すからお前の車で



▲ リョロスのスプリントで日本のWC以来の優勝を決めたエマ・エングストラム。手前左で声をかけているのが、スウェーデン監督のシーナ・エリクソン

俺たちオフィシャルが帰る」ということになった。頼みごとをして聞いてもらえること以上に、そうやってこちらが彼らにお返しできることがあることが嬉しい。オフィシャル的立場ではあるが、自分のワールドカップの一員であると実感した瞬間だった。

デンマークのコーチになったヤン・エリックとその部下はとんでもない奴らで、オフィシャルミーティングの後に車で帰る途中、突然「ところで、1000回のデートと100冊の本はどうなっているんだ？」と聞いてきた。日本語のホームページにはこの趣味の話は載せているが、英語で載せた覚えはない。いったいどうして彼はそのことを知っていたのだろう。

「最近の本を読むよりも本を書くほうが趣味になっているんだ」という話をすると、「じゃあ、デートの本を書いたらどうだ」と言ってきた。「そうだよな。俺もそう思うんだけど、出版社がうんと言わないんだ」というと、「科学的なアプローチで書いたらいいじゃないか」と畳み掛ける。恐れ入りました。それもまったく僕が思っている通りなんだけど。

なぜだか知らないけれど、僕がシャワーに忘れたかもしれない？デフケースを「おまえのためのものがあるんだけど」といって、デンマークのアシスタントコーチが返してくれた。デンマークは、北

欧とは言え、チームサイズも小さいし、レベルも格段に違うという訳でもなく、親しみやすいチームだ。

7月1日

ロングがリョロスから約50kmのティンセットで行われた。僕はここでワールドカップの日程から離れ、パリで開かれるIOFの総会に向かわなければならない。山田と志村を会場に残して、レンタカーでオスロに向かう。車がなくなると彼らにとっては厳しい状況になるかもしれないが、若い山田にとってはいい経験になるだろう。なによりそういう状況の中で、他国とうまくつきあって援助を引き出すことを経験してほしい。そういう関係が持てることは、競技で成功する上でも絶対に必要なものだ。

レンタカーの返却は22時に設定してあるので、時間的余裕はある。来るときに気になっていたビルケバイナーの道を通ることにする。林道のようなが、1時間も遠回りすれば十分だろう。それにノルウェーに来て森林限界を超えた荒野を見ないで帰ってしまうのはいかにも残念だ。ライドンにも会えない今、オスロ空港に急いで帰る理由はない。緩やかに登る道を車を飛ばす。密集して生える針葉樹を見ていると、この森をビルケバイナーたちが、幼い王子を連れて冬の荒野を滑りぬけた昔のことが偲ばれる。

およそ30分ほど車を走らせてたどりついた平原の風景は、いつ見ても気分をリフレッシュさせてくれる。車から降りると、そこらを歩かずにはいられなかった。ちょっとした小山の上まで歩いて周囲を見渡す。天気続きのせいか、モスも乾いていて、ベッドのようだ。こんな高原でテントを張って、歩きながら何日か過ごしてみたい。地球の大きさと自分の小ささを感じ、それでもその小さな一步一步の積み重ねが、自分の周りの景観を少しずつ変えていくという素敵な気分が味わえるだろう。1時間以上遠回りをし、60NKRの通行料を払っても十分通る価値のある道だった。

第21回IOF総会へ

7月2日

オスロから朝早い便でパリに移動。ピックアップの時間までは1時間ほどあるから、少しワープロ打ちでもしようかなと思っていたが、荷物が出てくるタイミングや、ターミナル間の移動に時間をとってしまい、ターミナル1についたら、すでに地図委員会のラザロ・ゼンタイが座って待っていた。そのうちノルウェーのオイビン・ホルトもやってきたが、いつもながら上機嫌だった。この日は半日理事会。

7月3日

各国の代表団たちが到着し始める。今回加盟が認められるタイも6人という大きな集団できていた。また台北も4人、中国、香港はそれぞれ2人の代表を送っている。彼らと一緒に話をしていると、自分はアジア人だという実感が沸く。自分も日本も、そのアジアをリードしていく立場にいるのだ。日本も今回は、世界選手権立候補である前回を除くと最大の3名という代表を送っている。IOFの情報技術委員会に羽鳥、トレイル0委員会に小山という2人の委員も出している。

7月4日

午前中はセミナーが開催された。このセミナーは総会に先立って、総会で議論の的になりそうな点をあらかじめ意見交換しておく場である。今回の主題は、WOC（世界選手権）の選考方法である。理事会の思惑とは違って、会場の意見は直前に予選を開催するというモデルで決着がついてしまった。



▲トレイル0委員長のアン・ブラギンス（左）と、委員の小山氏（右）

午後のMTB-0世界選手権の会場で、落合公也とエリートイベントグループのピヨルン、会長のスーを交えてWOC2005（愛知で行われる世界選手権）の日程について話をする。日本は8月中旬の開催を提案しているが、彼らは、それを少なくとも10日以上遅くするように要求している。世界選手権との間隔が短いと、ワールドゲームズにトップの選手が出なくなる可能性があると言うのだ。逆のパターンであった昨年の日本でのワールドゲームズでさえ、フィンランドを中心にトップ選手はワールドゲームズに参加していない。

IOFの言い分はわかる。しかし世界選手権とワールドゲームズの間隔が近いからワールドゲームズに出ないという大国の論理をそのままIOFが受け入れ、オーガナイザーにしわ寄せさせていいのだろうか。最近のIOFの決定や運営方向は、中立的に見えて、その分実はいんぷりシットに大国よりの決定になりつつある。

7月5日

日本での世界選手権開催が決定した総会から2年が経ち、また再び総会がやってきた。2年前のような緊迫した状況になる議題もない。私たちにとても真剣勝負に赴くような緊張はないが、2年前の自分たちと同じように「まな板の上の鯉」状態の、世界選手権開催立候補国の役員たちの顔を見ていると、あのときの心境がよみがえってくる。制限時間10分の中で、最後は秒に終われながらプレゼンテーションした。今度は自分がタイムキープをする係りなのだ。

議事はスムーズに進行し、お昼前には世界選手権開催国の投票となった。今回は隔年開催から毎年開催への移行に伴って、2006年と2007年の開催国を決める。95年に立候補したが、その後ノルウェーとスウェーデンが開催してしばらく開催をためらっていたデンマーク、東欧のチェコ、ハンガリー、ウクライナが立候補してきた。それぞれ5分間のプレゼンテ

ーションが終わって投票に入った。地域的なバランスと2004年にスウェーデンで世界選手権が開催されることを考慮して、2006年にウクライナ、2007年にデンマークに投票することを事前に打ち合わせた。

結果としてこの2つの国が世界選手権開催国に選ばれたのだが、予想に反してデンマークが2006年、ウクライナが2007年ということになった。4カ国で争った2006年は3回目の投票で、またデンマークをのぞいた3カ国で争った2007年は2回目の投票で決定したが、ウクライナを2006年に押すつもりだった日本は、この5回すべてに「ウクライナと書いたはんこが欲しいと思う」ほどウクライナと書き続けた。夜のパーティーの時、この話をウクライナの役員にすると、いつもは鋭い顔つきの通訳が笑顔で顔をくしゃくしゃにしながら、「ありがとうございます、むらこしさん」と（日本語で！）握手を求めてきた。

夜のパーティーで一昨日行われたオリエンテーリング大会の表彰の後、その日の理事選に落選したオイビンが立ち上がった。「今日は、IOFにとってもう一つの重要なレースがあった。私は若造（オイビンは53歳、理事候補の中では最高年齢である）なので、結果が得られなかったが、結果を出した候補を表彰の品をあげるのでもうもらいたい」という。テーブルの周囲の人に、「一発もらえるんじゃないの」とひやかされつつ、おそろおそろ言ってみると、彼はさらに続ける「今日、皆さんはIOFの予算を承認した。そしてここにいる理事たちは、この予算を適切に実行する責任がある。予算においては、世界選手権やマスターズの参加料からの収入は重要な位置を占めている。ここに来年のマスターズのPRのための帽子があるので、選ばれた理事諸君はこれをかぶって、来年のマスターズにより多くの選手を送ってもらいたい」

転んでもただではおきない姿勢以上に、そのユーモア精神には感銘を受けた。

怪我で出血その時あなたは？

7月13, 14日

富士でナショナルチームの合宿。この合宿では試みとして、他のスポーツの競技者にも門戸を開いた。小海のトレイルフェスタと伊豆のアドベンチャーレースで宣伝ビラを撒いたところ、5人の参加があった。なにしろ、当のオリエンティアよりも申し込みが早いという熱心さである。オリエンテーリングは初めてという人がほとんどで、もちろん体力的にも

かなりハイレベルの方もいた（たとえばトライアスロンで、もうちょっとで五輪代表クラス）が、オリエンティアの山の中での走りには驚いていた。さらに地図を読んで自分の進路を決めるなど、彼らにとってはマジックに見えたかもしれない。

そういえば、26日に開かれた富士登山競走では、五輪のマラソン代表である川島にカッシーと柳下が完勝であった。カッシーによれば、「7合目くらいで、ふらふら歩いてましたね。」ということだ。オフトレイルでのナビゲーション技術とランニング能力は、私たちが誇れる技術だ。

二日目の練習の時、事故が起こった。最初のメニューで稲津と小泉とでランオブをしていたとき、僕は先行する稲津とはルートを変えて、アタックした。ランオブしている相手のルートが遅いと思ったとき、速さに疑問を感じた時よくやることだ。こうすることで、レースの時一人では確信できないミクロなルートチョイスのタイム差を実感することができる。林の中の直進を敢えてした僕のルートは当然遅いとは思ったが、炭焼き釜のコントロールについてみると、まだ稲津は着いていない。威張ってやろうと思ったその瞬間、稲津と一緒にいた小泉が「怪我です！」と声をあげた。駆け寄ってみると、左の腿から血が噴出し、足首まで真っ赤だった。

「動脈だったらどうしよう」と一瞬動転しかかったが、1年前のディレクター講習時、スポーツ医学の講習で「動脈血といえどもたかだか140mmHgの圧力です。手で抑えれば絶対止まります」という言葉を思い出した。稲津をその場に寝せ、脚をV字に折って、手のひらで止血した。だいたいこういう時の死因の多くは怪我そのものよりもショック死だという。けが人を元気づけ、脚に血液が流れていることを確認しながら、「大丈夫」と安心させた。

この拳上・圧迫が功を奏したのか、それ以上出血はなく、伝令に出した小泉が呼んだ救急車が30分後にやってきた。出血も止まっていたので、タイツは切らずに脱がせることになった。僕の時とは違い、太ももに卵型の2cmくらいの穴がぽっかり空いていた。驚いたことに、僕がそこにあると思っていた傷口の位置とは若干ずれていた。反省。

出血も止まり、稲津も元気だったので、救急車に同乗する必要はなかったが、せっかくの機会なので、「できれば乗りたい」というと、救急隊員は乗せてくれた。

彼らは、現場近くの5000分の1くらいのかかなり正確な地図を持っていた。確実に分かる建物名などを言えば、本部からそういう地図を受けられる（電送?）のだそう。

救急病院での手当ては、ほぼ僕の怪我の時と同じで、特に目新しい発見はなかった。前回と違い、僕はつきそいなので、次から次へと運びこまれてくる、けが人をみなくちゃならない。ガラスで手の指に大怪我をした料理人、フォークリフトで遊んでいて？足の指がぶらぶらしているおじさん、見たくもない、聞きたくもない話ばかりである。もっとも、自分自身も血まみれのトリムで待合室の廊下をうろろろしているんだから、他人からすれば、「おまえの方こそ見たくもない」だっただろう。

化膿防止の洗浄のために、傷口をさらに切開したが、幸い傷も深くはなく、筋肉の損傷もなかったため、1時間ほどの処置で無事戻れることになった。怪我はしないにこしたことはないが、トップレベルで限界に挑んでいけばゼロにすることはできない。皆さんもご注意とともに、怪我したときにどうするかは、常日頃から考えておこう。

チームメートの結婚式へ

7月27日

99年の世界選手権遠征でチームメートだった山口大助の結婚式が千葉の浦安であった。同じ千葉大の安形季見子とだ。14:30までにいけばよかったので、午前中暑かったが30分ほどジョグをした。

チャペルに入るときには気づかなかったが、式には加賀屋、カッシー、松澤、藤城も来ていた。さらに後になって気づいたのだが、これが99年の世界選手権遠征男子チームメンバーであった。二次会では時々あるが、いつも一緒にいる彼らでも披露宴で席を同じくするのは新鮮な気分だ。夜に開かれた二次会にも、千葉大関係者や東関東OLKだけでなく、多くのオリエンティアが来ていた。20年前

には、こうしたプライベートな場所で、他のオリエンティアと時間をすごすことはなかった。私たちは新しいスポーツ文化の時代にいるのだ。

ちなみに、質問したオリエンティアの全てが午前中に走っていた。あのトレーニング嫌いの利佳ちゃんが7時半に起きて天覧山に走りについてきたというのが驚きだ（失礼!）。

7月29日

大学で試験を終えた後、東京の山と溪谷社へ。子どもが野外活動で出会う危険とその回避についての啓発本の校了である。企画から1年。目次を考えたりアイデアの段階は楽しいものだ。だが、本というのは実際に文章を書いてみると、思い通りにはなかなか書けないものだ。特に校正の段階では、自分の文章を何度も精読しなければならない。自分のできの悪い文章をこれでもかというくらい見なければならぬほとんど拷問のような作業だ。アイデアを形にする作業は、いつでもそんなものかもしれない。

8月3日

夏の恒例行事である富士登山駅伝にスコードチームの一員として8年ぶりに参加した。23年前に東大OLKの創生期のメンバーが初参加して以来、スコード、そして東北大、静大、チーム白樺とオリエンタリングの参加チームは毎年増えている。

「自衛隊の運動会」と化した今では、上位に進出するのは至難の技だが、日本最高峰をチームで走って極めるレースには、成績を越えたロマンがある。1区山口や5区松澤の快走で34位。

(おわり)



▲ 富士登山駅伝、スコード4区村越（右）、東大OLK山本（右から3人目）